

ディレクター日誌（活動・参加者の様子）

期 日：令和4年7月27日（水）～令和4年7月30日（土）【3泊4日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家周辺（山口市阿東）

参加者：サマースクール参加児童の保護者と教育関係者9名

令和4年7月27日（水）	1日目	トレーニングフェーズ	自然の家→方丈原
はじめに・・・ サマースクール体験会では、OBS（アウトワード・バウンド・スクール）の手法を用い、3泊4日の短い日程の中に「トレーニングフェーズ」「エキスペディションフェーズ」「ファイナルエキスペディションフェーズ」「コンクルーディングフェーズ」の4フェーズを基本原理として、活動を構成している。			

今年度の参加者は10名で、母親が4名で父親が3名、教職員関係者が3名という構成になった。しかし、昨今の新型コロナウイルスの影響で1名の欠員となり、最終9名での実施となった。

わが子を参加させたい、自分自身も体験してみたい、指導者研修会に参加するにはハードルが高いのでまず短期日程の体験会に参加してみた、初任者研修科目の一つとして参加した等、参加理由は様々であったが、数多くの応募の中から選ばれ、縁のある仲間たちとの3泊4日がスタートした。

開会式の後、アイスブレイクは事前説明会の際に実施した時と比べ、2回目ということもあり、表情が柔らかくなるのが早く感じた。4日間の中で一人ひとりがどのような気持ちの動きがあるか意識してほしいので、安心ゾーン、ストレッチゾーン、パニックゾーンについて説明をした。



その後各自が持ってきた荷物と貸出の道具をザックに詰めていく。チャレンジプログラムの様に丁寧に説明するのではなく、参加対象者の年齢に合わせた説明を実施した。道具の準備をするに当たって、3チーム（装備係・食材係・GORP係）に分かれて準備を進めた。必要な道具は、参加者自身が倉庫から持ってくることで最終日の返却時に指示することを簡略化できる。また食材については、コロナ対応として、全体で食事をする機会を極力減らしたため、個食（一人での食事）が多くなり、一人当たりの食材の所持量が増えている。

ている。

各チームの準備が終わった時点で個人装備のダッフルシャッフルを進める。大きなビニール袋に必要な装備を軽い物から順に詰めていく。特に雨に濡れないよう死守する必要のあるもの（主に寝袋・着替え）を優先して入れる。次に共同装備（グループ全体で使用する道具）を分担していく。昨今のコロナ対策として一人1テントで就寝する方針を取っているため、各自テントをパッキングする必要がある。ただし、全てのテントが同様のものではなく、サイズも重量も違うため、参加者同士で話し合い、全員が納得する形で合意形成を取りながら進めた。共同装備は誰が何を持つか決める必要があるため、全員のザックの重量が同じになる様に分担し、パッキングを行う。試しにザ



ックを背負うとその重さに驚きの表情や不安な表情を見せる人もいた。この際、子どもたちも同様の重量のザックを背負っていることを聞き、驚きの表情を見せていた。

その場で「重い」と言える人と言えない人がいる様子が見てとれたが、発言する人はいなかった。そこで各自のザックの重量を確認する活動をしたところ、特定の人荷物が重いことが判明したが、その人にとってはさほど重くなかったのか、特段気にする様子はなかった。荷物の重さは、今後の行程において、グループの歩みに関わる大きな要因の一つである。各自がその日の体調も含めて総合的に持てる重さを判断し、グループに伝えて合意形成を図る。これも、このプログラムにおいて、チームづくりに関わる重要な仕掛けである。

バックパッキングが終わり、出発前に食事を済ませるために体育館で輪になる。十種ヶ峰むすびを頬張り、午後からの出発に備えて体力をつける。

食後、出発の準備をし、玄関前で登山靴の履き方、靴紐の結び方、スパッツのつけ方やザックの背負い方など、一通りのレクチャーを行う。全てが揃った所でインストラクターから地図とコンパスの使い方についてレクチャーを受け、今日の宿泊地である方丈原に向けていよいよ出発となる。随時、歩き方・水の取り方などトレーニングをしながら進む。



体育館からコンパスを振り、地図を読み、方丈原をめざす道中、行く手を阻むものを避けてグレンデを歩き、栗園を横切り、方丈原に入る。山道を歩くときの歩幅や重心移動、姿勢、ペース、休憩の取り方、水の飲み方、携行食（GORP）の食べ方などを指導していく。



インストラクターとサブインストラクターに全てを任せ、ディレクターは先行してテン場（宿泊場所）の準備を行う。体験会プログラムのスタッフは最小限構成なので参加者と班付きスタッフ2名に対してフルバックアップを行い、プログラム中のトラブル等に備える。

方丈原で到着に備えていると、インストラクターより無線連絡が入り、参加者1名が体調不良にてペースが落ちている旨の報告を受ける。対象者の状況をうかがい、最善の対応を取るべく準備を進めたが、回復の兆候は見られず、一旦、自然の家にて休養を取ることに。残りのメンバーで方丈原をめざす。この時、グループでは、対象者の負担を減らすべく共同装備等の荷物を減らし、少しでも歩き易い状況にするための行動を起こしていた。子どもたちのグループも、トレーニングを経てこうした班のためにできる行動を自分たちで考え、選択して、実行するようになる。これも、チャレンジプログラムの追体験の一つである。

方丈原に向かうコースも数日前に子どもたちが歩いた道であり、今夜宿泊する場所も数日前に子どもたちが宿泊した場所である。そのことを参加者に伝え、初日ながら感極まる方もいらっしまった様だ。

テン場に到着後、すぐにインストラクターが中心となって各自テントを設営していく。初めてテントを設営する人、個人的に登山をしていて慣れてる人、それぞれであるが、ここでは経験者が中心となって設営が進んでいた。途中、雲行きが怪しくなり雷鳴がこだまする中、せっせと設営する姿は遅く思えた。

テント設営が済んだ人を中心に、次はみんなで夕食やミーティングを行うための場所を作る。共同装備に含まれるタープを設営する際は、インストラクターからロープワークのテクニックや張り綱のセッティング等レクチャーを受けながら作業を進める。

タープを張り終わると、次にタープ下にブルーシートを敷き、荷物（ザック）を置き、その中から夕食作りに必要な共同装備を出していく。クック（料理係）が中心となって全員で準備を進める。パッキング時に何を持つか決めたことを思い出しながら話し合い、自分ができることを探しながら調理を開始。初日の夕食は、棒ラーメン&スパムと参加者のオリジナリティ溢れる料理となった。

夕食後、1日を振り返るミーティングを行い、開会式から夕食までの様子を振り返る。「何があったのか」「その時の気持ちは？」「何か声を掛けることができたのか」「何か行動ができたのか」と振り返ることで、グループ内での個人個人の関わり方や自分の立ち位置を確認でき、気付くきっかけとなる。また1日を通してのハイポイント、ローポイントをウルトラマンレベル（手を使ったバロメーターで気持ちを表す手法）を使うことで、意思表示がしやすくなっていた。その後、翌日の行程確認、役割決めを行った後、少し早いが就寝となる。



ここで体験会プログラムにおいて新たな問題に直面することとなる。

班に帯同しているインストラクターが、家族にコロナ感染の疑いが出たため、緊急処置としてプログラムから離脱することになったのだ。今後のプログラム進行についても該当家族の検査結果によっては中断となることがあり得るが、発覚した時点では参加者の就寝後であったので、翌朝主催者より告知することとなった。

令和4年7月28日(木) 2日目 エクスペディションフェーズ 方丈原→ロックサイト→福谷

朝5時に参加者が起床、集合したところで、昨夜分かったことと今後の行動について告知した。検査結果が分かるまでは、プログラムの続行が可能なことを伝えた上で、参加者の思いを確認した。気になること、不安なことなど様々なことが頭の片隅にちらついているであろう参加者だが、プログラムを楽しみたい、子どもたちと同じ体験を通して共感したいという思いも強く、ここで中断することは願っていない様子で、話し合いの結果、プログラムの続行が決まった。

2日目の活動としては、テント撤収・パッキング後、MTB（マウンテンバイク）サイクリングにてロックサイトに移動し、午前中にロッククライミングを行う。ロッククライミングは、グループの活動でもあるが、個人での活動の意味合いももつ活動である。個人として、恐怖・不安・あきらめ・達成感・不屈等の葛藤を経験する場であり、自分自身と向き合うという意味で良い成功体験もしくは失敗体験を得ることができる。またグループとしては、プレイヤーを同じグループの参加者が行うので、仲間の助けがなければチャレンジすることすら叶わない、と同時に仲間の誰かがロープで支えてくれているという安心感や信頼、信用という気持ちの動きが大きく見られる。そして、ロッククライミング後に、振り返り、バックパッキング、ソロ（山の中で一人の時間を過ごしこれまでのことについて振り返る、「動」

の活動に対して「静」の活動)を予定している。

MTBサイクリングを開始し、神角林道を神角神社方面に向かって下っていく。途中、チェーントラブル等もあったが、予定より早いペースで休憩ポイントの神社まで進むことができた。

神角神社に到着と同時にコロナ感染疑いの件について連絡があり、家族の方の感染が確認され、離脱したインストラクターも検査を行うこととなった。プログラムとしては、現状で濃厚接触者とはなっていないためプログラムを続行し、陽性の結果連絡があり次第プログラムを中断することとした。適宜参加者に告知した上でサイクリングを続行し、ロックサイトをめざす。

ロックサイトに到着後、サブインストラクターと十種ヶ峰青少年自然の家の職員2名に参加者を託し、ディレクターは2日目のテントサイト、ソロサイトの準備に回る。ロックサイトでは、一人ひとりが目標に向かって岩にしがみ付き、登り切ったようだ。個人でのチャレンジ中に止まってしまった場面でも、他の参加者(仲間)からの声掛け、声援を受け、登り切ることができたようだ。

ロッククライミング終了後、インストラクターの検査結果が陰性だったことを参加者に告知し、今後の進行についてコンセンサス(合意形成)を取るために時間を取った。一人ひとりの現時点での本音を聞き合い、最終的に、不安はあるが我が子が歩いた道を親自身が踏みしめ体験することが良い経験となるし、ここにいるメンバー以外が関わることがないのであれば続行でよいのではないかという結論に至った。



この時点で予定にないミーティングとなり、一部行程を変更して再度 MTB にて本日の宿泊地をめざすこととした。目的地である福谷林道の DIP 場(ディップ場=水浴びを行う場所:小川)を参加者主体でめざす。グループにはスタッフ1名が付き添い、ディレクターは先行して今後のプログラム進行のための準備を行い、グループの到着を待つ。その後、グループが到着し、DIP の指示、これから歩くルートを確認を行う。DIP では子どものように童心に戻り、小川に浸り、汗を流し、そして・・・とにかくはしゃいでいた。だんだんと体も冷え、落ち着きを取り戻したところで身支度を始める。次の目的地をめざすために、再度バックパッキングを行うが、皆清々しい表情が垣間見えた。

林道をひたすら北上し、何度か橋を越えて本日のテント場に到着。今夜はソロ泊(一人で身と心を休める)なのでソロ入り前のミーティングを行い、男性・女性と別れてソロ入りをする。スタッフの誘導の

もと、一人ひとりを指定した場所に配置し、ソロのスタートとなる。

ソロの間中は、声を発することなく一人で過ごす。テントを張るのも一人、夕食を食べるのも一人、近くにいる他の仲間と目が合っても会話をすることはできない。自分と向き合い、これまでのこと、これからのこと、家族のことを振り返ってみたり、疲れた身体を癒したりと自由に過ごす。

令和4年7月29日(金) 3日目 ファイナルエキスペディションフェーズ 福谷→十種ヶ峰山頂→自然の家

翌朝、スタッフが各テントを回り、ソロ明けのタイミングを伝えていく。全員が揃うまで会話はできない。

30分後に再度迎えに行き、全員が揃った状態で「ブレイク！」の声がかかる。この時点でソロ明けとなり、会話も解禁される。その後、早々に朝食を取り、ファイナルツアーに備える。ファイナルツアーでは、出発の時間を指定し、グループの仲間たちだけで基本的に活動を進めていく。スタッフは「妖精さん」となり、グループが活動している様子が見れる距離で、付かず離れず移動していく。見えていないがいない存在である。基本、命に関わるようなことがない限り、介入しないことを参加者に伝えておく。

出発して間もなく、参加者たちは予想以上のスピードで歩みを進めていった。地図を頼りに進み、道中子どもたちが歩いたであろう痕跡を発見しながら、感心しながら歩いている様子が見られた。この日はインストラクター一人では班の対応が不十分なため、ディレクターも帯同する形で全体のフォローをしながら歩いていくこととした。歩いていく参加者の表情をうかがいながら、インストラクターとこれまでの様子との違いや変化等について話をする。



地図やコンパスを駆使しながら目標に向かって邁進する姿は、凄く格好良い。と、ここでハプニング発生。笛の音が聞こえる。「何かトラブル!？」と思い駆け寄るが…、話を聞いてみると、先程まで持っていたはずのペットボトル(飲料水)が無くなっており、かなり前で無くなっていたにも関わらず言い出せなかったとのことだった。その話を聞いた瞬間「妖精さん」の目が輝く。

「ザックの中を確認した?」「ほかの人のザックに紛れ込んでない?」「いつのタイミングまでであったことの確認ができています?」など話を振ってみる。確認を繰り返し行こうが発見には至らず。そこで当事者を含めない数人が歩いて来た道に戻って確認してくるということに。さらに話を重ね、当事者も思い出すために同行することに…。結局、ディレクターが他のメンバーとこの地点に残り、捜索に向かうメンバーにインストラクターが帯同することとなった。結果、一つ前の休憩場所に落ちていたということが分かった。



その後は順調に歩みを進めていくが、山頂取り付きの稜線に出れるリミットぎりぎりのペースだった。遅くなると天候の変化が危惧されるが、その日は空気が澄んでおり、積乱雲の発生もなく清々しい空を望むことができていた。山頂取り付きの稜線上でもペースが落ちることもなく、進んでいく。時折視界が開けた場面では、歓声が聞こえてくる。





山頂からの無線通信も入り出し、もうすぐで山頂に着く少し前で妖精たちが参加者たちに追いついた。山頂にいる妖精さんに写真撮影を要請し、歓喜の瞬間を待ちわびる。

そしてついに参加者たちは無事、十種ヶ峰の山頂に到着する。そこには自然の家の職員が待ち受けていた。サプライズでポリタンクに入れた 20L もの水を担ぎ上げてくれていた。全員が山頂の三角点にタッチし、登頂の喜びを共有する。



その時の表情からは、自信に満ち溢れ、そして山頂からの景色に感動している様子がかがえた。過去数年で一番きれいな景色。それは普段はなかなか見ることのできない、益田から萩、長門方面まで一望できるものだった。子どもたちも眺めたであろう景色を眺め、感慨に浸る姿が凛々しく見えた。水を飲み、余った水を頭から被り、これまでの疲れを吹き飛ばすくらいの爽やかさを若者たちが見せてくれていた。中にはダニに好かれた人もおり、とても賑やかな山頂のひと時を味わうことができた。



ここからは自然の家をめざす。ファイナルツアーのメイン目標である十種ヶ峰登頂はクリアしたが、次に自然の家に戻ってからクリーンアップ行わなければならない。3泊4日のうち、1日は自分たちが使用した装備一式をクリーンアップ（清掃・洗浄）して、次に使う人に託すというOBSの手法の一つである「奉仕」の活動に充てる。そのためにも早く下山して作業に移る必要があったため、「妖精さん」からの提案で、最短ルートであるロード（道路）を降りる選択肢を選んでもらった。

しかし、最後の最後で地図読みを誤り、嘉年ルートを選んでしまう。自然とミーティングを始め、地図の確認、現在地の確認を行う。ここで分かったことは、地図と現在地の把握はできていたが、地形がうまく読んでいなかったということだ。先入観が先行し、下山ルートだから登り坂はないと思い込んでいた様である。ちなみにこの考えは遭難になり易い。

そこからは、慎重にルートを選ぶため、意見交換が活発になっていった。途中、疲労がピークとなり声を発することが少なくなっていたが、若い先生を中心に一人しりとりを始めたり、ゲームを始めたり、話題を振ったりと気丈に振舞ってくれたお陰か、他の方々も徐々に元気を取り戻していった。苦しい瞬間もチームの成長につながる貴重な体験である。

無事に自然の家に到着し、裏手にある車庫前でザックダウン。そこには自然の家の職員さんが切り、盛り付けてくれたフルーツが待っていた。2泊3日の遠征の終了を祝うフルーツパーティーの開催である。

参加者とスタッフと一緒にフルーツを食しつつ、2泊3日の行程を振り返る。それぞれ不安もあったが、我が子が歩いたルートを迎



り、挑んだロッククライミングに挑戦し、歓喜に満ちたDIPで疲れを癒し、また寂しかったかもしれないソロ泊や自分たちの力だけで挑戦したファイナルツアーという追体験ができたことに感動している様子だった。また参加者の表情も初日と違い変化している印象がとても強く表れていた。

令和4年7月30日(土) 4日目 コンクルーディングフェーズ 十種ヶ峰青少年自然の家

出会いがあれば別れが訪れるように、4日間のプログラムもいよいよ最終日。この日も日の出とともに起床となる。昨日、初日に離脱したインストラクターが再検査で陽性となった連絡を受けたが、離脱後の家族との接触が原因である可能性が高いこと、チャレンジプログラムの最終日であり子どもの迎えが必要であることから、念のため極力他のプログラムとの接触を避ける形で、サマースクール体験会の継続を決めた。

4日目ともなると慣れたもので、朝食をテキパキと済ませたのち、残っていたクリーンナップと物品チェックもスムーズに進めることができた。

解散前のファイナルミーティング。寄せ書きしたバンダナを参加者同士で渡し合いながら、お互いへの感謝の気持ちを伝えていく。充実感に満ちた誇らしい顔や感動の涙を流す顔等、4日間の思いが詰まった時間となった。このプログラムがなかったら出会うこともなかった年代も職業もバラバラのメンバーだからこそ、4日間の中にたくさんのドラマが生み出され、強い絆で結ばれていった。この出会いと経験が、それぞれのメンバーのこれからを力強く後押ししてくれることを心から願っている。



最後にディレクターの思いを少し・・・

チャレンジプログラムやクエストプログラムなど、子どもたちが成長していく姿を心待ちにしている親御さん、そんな親御さんも参加して、共通の話題として家庭でも話ができる関係性も良いと考えます。この関係を起点として親子で山を歩く、野山を駆ける、テントで寝る、寝食を共にすることも期待したいが、そもそも家庭での生活がこの関係です。

そこで、体験会に参加したお父さん、お母さんが何かのエッセンスを得て、子どもたちと新たな挑戦をする切っ掛けになったのであれば収穫ありと考えます。我々が子どもの頃、30～40年前では当たり前のように自然体験をしていました。今では外に出ることも少なく、少し歩けば日陰を探す。もう少し歩けば座り込む。そんな子どもたちに、近くにいる大人が手を差し伸べる関係が自然と発生すると良いですね。保護者枠だけでなく、教職の若い世代の方々が参加して下さることで、学校現場での活動の切っ掛けになれば更に良いですね。

パソコンやタブレットで学習するのではなく、外に出て五感を最大限に活用して成長を促して欲しいと思います。なんだかまとまりがありませんが、我々は何かしらの切っ掛けを提供できれば良いと日々考えています。